



Title	カーシム・アミンと『女性の解放』(2)
Author(s)	竹田, 新
Citation	アラブ・イスラム研究. 2011, 9, p. 131-150
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105937
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

カーシム・アミンと『女性の解放』— (2)

竹田 新*

(I)

本稿¹⁾はエジプトなどで現在も論議の対象となっているカーシム・アミンの『女性の解放』²⁾を取り上げ、その「前書き」「序」「(1章) 女性の教育³⁾」の内容を紹介する。使用するテキストは、1899 (1316A.H.) 年にカイロのタラッキー (al-Taraqqī) 書店が出版した初版である。

(II)

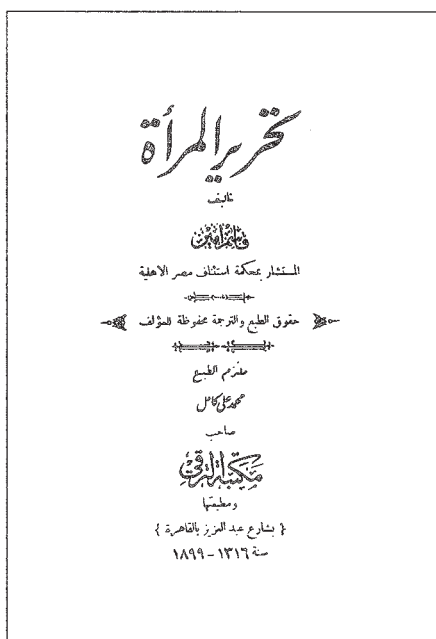
前書き

ここで述べることはそれぞれが一冊の本のテーマになるような内容であるが、「私の意図するところは、それについて考える人が少ない問題に心を向けさせることであり、女性の問題、また人間存在における女性の位置について語り尽くす書を書くことではない」。そして、この書が種子となってそのような書は後の時代に書かれるだろう⁴⁾。[p.1]

「私が書いたものを読めば、私が短期間で希望が実現することを欲しているのではないことがわかるだろう」。というのは、国の変化は個々人から全体へとゆっくり起こるからである。

[pp.1-2]

「今日の我々の状況は人間の力で直ちに変わる



『女性の解放』初版の表紙

* 大阪大学 教授

- 1) 前稿「カーシム・アミンと『女性の解放』— (1)」(『アラブ・イスラーム研究』6 pp.95-107 掲載)では、アミンが『女性の解放』を出版するまでの過程を主に扱った。
- 2) 出版当時の議論については、前稿の註36参照。現在に関しては、インターネット上、とりわけ宗教関係のサイトでの議論が夥しいが、宗教関係以外の書物に限っても、管見では、al-Majlis al-A'la li-l-Thaqāfah[2001]の『女性の解放から100年』Mi'at 'ām alā Tahrir al-mar'ahから、Badran[2009]などまで、多数が議論の対象としている。
- 3) 教育と訳したアラビア語は tarbiyah であり、養育、育成の意味を含み、家庭教育、育児を指す場合が多い。アミンは教育の意で ta'līm という語も使用する。p.19の最後の引用箇所と p.37の二つ目の引用箇所は tarbiyah と ta'līm、p.42の引用箇所は ta'līm と tarbiyah を併記している。また、ta'līm (muta'allim を含む) を、p.20、p.23、pp.24-25の後半部、p.25、pp.25-26、p.53からp.62まで(但し、p.53とpp.55-56の精神の教育を除く)で使っている。その他の箇所はいずれも tarbiyah という語である。
- 4) 引用箇所からこの部分までと、序の p.4、p.6、pp.6-7、p.7は、Zaydān[(1902), 1994 : vol.16, pp.109-10]によるこの『女性の解放』の紹介に、すでに引用が見られる。

ことができないが、我々がこのような状況にあることは恥ではない。どの時代もその時代に行われたことにしか責任を問われたいから」であり、自らの慣習の欠陥を否認して最善のものと主張し、真実に抵抗することこそが恥であり、改善の障害となる。「国が何らかの改善を行い得るのは、改善の必要性和改善へ導く手段を実感した時だけである」。⁵⁾ [p.2]

「エジプトの知識人の中には、自国が大いに改善を必要としていることを疑う者は誰一人いないと私は思う」が、その知識人が我が国のひどい状況を放置している。⁶⁾ [p.3]

「私は我が国の改善の一つの扉を叩き、国全体に大きな影響を持つ人々のグループに改善の一つの面を求めた」が、この要求が正しいなら、「そのような知識人は私がこの小著に書いたことを広め、これを支持して受け入れ実行する義務がある」。⁷⁾ [p.3]

(III)

序：社会における女性の状況 一国の道徳⁸⁾ 的状況に拠る

「私は真実を愛する全ての人に対して、私と共にエジプト人女性たちの状況を調べるようにと呼びかける。私はそのような人が私の行き着いた結論にそれぞれ辿り着くと確信している。それは彼女たちの状況の改善が必要であるという真実だ。今日発表するこの真実は長い間私がいつも考えていたもので、その間私はこれを吟味し、検証し、分析してきた。そしてついにこの真実はそこに混ざり込んでいた誤りの全てから解放された時、私の思考の大きな部分を占め、その他の事柄を押しつけて打ち負かした。この真実は思い浮かぶと私の心を捉え、その利点へと私の注意を向け、その必要性を私に思い出させるようになった。そこで私はこの真実を思考の場から、唱道、陳述の空間へ持ち出すより他はないと考えた」。⁹⁾ [p.4]

あらゆる考えを発表に向かわせるこの不思議な力は人類に進歩をもたらし、その素晴らしい未来を保証するのであるが、うまく使わないと、手に負えなくなる。¹⁰⁾ [pp.4-5]

その証拠は考え方の違いによる争いに満ちた歴史であり、それは過去のイスラーム諸国に見られた。西洋諸国では、今なお知識や技術において、国内の個人間での闘いと、国際化が進んだ今世紀には特に国家間での闘いが見られる。¹¹⁾ [pp.5-6]

「安逸を好みがちなのは我々のような民だけである。我々は理性の使用を等閑にしてきたために、それはついに植物に適さない休閑地のようになってしまった。また我々は怠惰に引きずられて、いかなる正しい考えにも敵意を向けるようになってしまった。その正しい考えとは、初期の正しいスンナに由来するものであろうと、最近の公益に適うものであろうと、今の人々が新規で馴染みがないとみなすものである」。¹²⁾ [p.6]

「怠惰で議論に弱い者はしばしば明白な真理に対して偽りの言葉を投げつけて、それを追い払おうとし、それはイスラームにおいて異端だと言って満足している。こうした言葉を投げつけるのは、理解する苦勞を免れたい、調べたり実施したりする面倒から逃れたいからに他ならない。それは、あたかも神がムスリムを特別な土から創造され、人

5) 以上の前書きは、Sakākīnī[1965 : pp.73-74]、Hātim[2001:p.112]などに抜粋・引用が見られる。

6) adab(複数形 ādāb)であり、作法、礼節などの意味も含む。道徳という意味ではアミーンはより一般的な語 akhlāq も使う。以下、道徳と訳したもののうち、p.18、p.20、p.21、p.23、pp.28-29、p.43、p.48の「良き道徳」は adab 或いは ādāb、その他の箇所は全て akhlāq である。

類や生物全てが従う自然法の掟からムスリムを自由にされたかのようなものである」。[pp.6-7]

「今日私が発表することを異端だと言う人々がいるが、私はそのとおり、異端を提議したと言おう。しかし、それはイスラームに対する異端ではなく、慣習と行動様式に対する異端なのである。その慣習と行動様式とは、完全な遵守が賞賛されているものである」。[p.7]

「慣習は変わらず、取替えられることもなく、永遠にそのまま保たれるべきものであるとムスリムはなぜ信じているのだろうか」。変化こそ命と進歩の条件であり、停止は死と退歩につながるのが神の則である。慣習は時と場所に応じた人間の理性の産物であり、世界各地のムスリムの慣習は一つではなく、ある国の慣習は時代を超えて不変なのではない。[pp.7-8]

どの国のどの時代にもその理性に応じた慣習があり、それは様々な要因によって変化する。理性が進歩すれば慣習もそれに応じる。だからスーダンとトルコの慣習は違うし、エジプトとヨーロッパの違いも同様である。[p.8]

慣習とは自分自身、家族、同胞に対する行動様式であるから、未開国と文明国では同じではない。各個人の行動はその知力や教育の程度によるからである。[pp.8-9]

ある国の慣習とその文明化の度合いの結びつきは強く、人々の理性の程度が変わらなければ慣習は変わらない。慣習の力は宗教や法に勝るほどで、それは今日我が国で見られる通りであり、「慣習が宗教そのものに勝り、宗教を損なって歪め、宗教がその宗教を知る全ての者に認められないものになることもある」。[p.9]

これが我々の目にする事柄の根源であり、女性の状況とその国の状況との緊密な結び付きは、歴史が証明しており、人間社会の成立時に女性と奴隷が同じ状況にあったことを我々は知っている。古代のローマやギリシア、イスラーム以前のアラブで女性は男性の所有物のように扱われてきたし、現在のアフリカ、アメリカ、アジアの一部でも同様な状況が見られる。[pp.9-10]

これら「力の法」による支配は、初期の社会だけでなく、現在の専制政府にも見られる。[p.10]

一方、文明の高い国々では女性の地位は上がっていて、まず米国、次いで英国、フランス、オーストリア、イタリア、ロシア等の女性と続き、彼女らは自立する権利、自由になる資格があると感じ、それらを得る手段を探し、人間としての全権利を求めるのである。[pp.10-11]

キリスト教は女性の自由や権利について何も語っておらず、西洋人の女性が自由を得たのは、キリスト教によるのではなく、彼らの国々の道徳や慣習によるのである。「ある宗教に慣習への力や影響があるとしたなら、ムスリムの女性は今日地上の女性の先頭にいるだろう」。[p.11]

「イスラーム法は女性と男性が平等であると定めた点で他のあらゆる法に先んじていた。全ての国々で女性が低く貶められていた時代に、女性の自由と自立を公言し、女性に人権の全てを与えた。また女性に売買や贈与・相続などの全ての民事において男性に劣らない法的能力を認めたので、女性は父親や夫の許しを得る必要がなかった。これらの優れた点は現在の一部の西洋の女性でさえ未だ得るに至っていないものであり、これら全ては女性の尊重と男女間の平等が寛容なイスラーム法の原理にあることを証明している。更に我々の法は大いに女性に優しく、女性には生活の重荷を負わせず、女性は家計や子供の教育の費用負担に加わる義務がない。義務だけは男女平等で権利は男性を優

遇する一部の西洋の法とは違う」。

[p.12]

「イスラーム法では、結婚契約の解消の問題においてさえ、女性が男性と権利において同等である傾向が明らかであり、(中略) 西洋人が想像したり、一部のムスリムが思うものとは異なっている」。

[p.12]

「私の見る限り、イスラーム法が女性に対して男性を優遇している問題はただ一つ、一夫多妻制である。その理由は明らかで、家系の問題に関わっており、それなくしては結婚が成り立たないからだ。(中略) 要するに、イスラームという宗教の規定の中にも、その宗教が目指すところにも、ムスリム女性の劣位に関連付けが出来るものはない。むしろ事情は逆で、その宗教は女性に社会の中での高い地位を獲得させたのである」。

[pp.12-13]

「しかし残念なことに、イスラームが広まった国々から受け継いだ悪しき道徳がこの素晴らしい宗教を圧倒し、かつての慣習や誤った考えが持ち込まれた。これらの国々では、イスラーム法が女性に与えた地位に女性を到達させるほどまでには認識が至らなかった。このような道徳が続いた最大の要因は次々と我々を支配した専制政権にある」。

[p.13]

イスラーム社会では、法によって統治者と被統治者の権利が定められていても、統治者が絶対的な力を持つと専制となった。

[pp.13-14]

統治者は不正を働き、民衆だけでなく宗教さえも弄んだ。

[p.14]

そして、力の支配の影響は周辺や下の者に及んだ。

[p.14]

「このような専制政権の影響の一つは、力が強い男性が弱い女性を軽蔑し始めることである。その原因の一つは専制政権の国に現れる最初の影響が道徳の荒廃であるからだろう」。

[pp.14-15]

少し前の専制政権の支配下のエジプト人は、不当な扱いを受けた者が下の者たちを更に不当に扱ったことを知っている。

[p.15]

「この状況では、人間が力のみを尊重し、恐怖によってのみ抑制されるのは当然である。女性が弱いと、男性は女性の権利を抑圧し、女性を軽蔑して冷遇するようになり、女性の人格を踏みみにじった。女性は家庭での立場が妻であれ、母であれ、娘であれ、非常に貶められて生きてきた。女性は何者でもなく、考慮されることもなく、意見も持たず、男性に従った。彼は男性であり、彼女は女性であるという理由による。女性の人格は男性の人格の中に消え、家々の隅に隠れられるだけの存在しか残らず、女性は無知という特徴を持ち、闇のカーテンに包まれ、男性の快楽の道具として使われた。男性が好きな時に楽しみ、好きな時に道に投げ捨てるのだ。男性には自由、女性には隷属、男性には知識、女性には無知、男性には理性、女には愚かさ、男性には光と空間、女性には闇と牢獄、男性には命令と禁止、女性には服従と忍耐、男性には存在の全てがあり、女性は男性が支配する全ての中の一部であった」。

[pp.15-16]

「男性は女性を軽蔑しているので、家を白人あるいは黒人の女奴隷たち、または複数の妻たちで満たす。男性は望んだどの女性も求め、欲望に走り、贅沢の衝動と快楽に満たされたい気持ちに動かされ、行いについて宗教が善意から定めた事柄、義務として課

7) Bahā'al-Dīn 版 [1993 : p.28] では、引用部中のここまでが一つの段落になり、次の文からは新しい段落になる。

した公正さを気にも留めていない」。[p.16]

「男性は女性を軽蔑しているので、妻を理由もなく離婚する」。[p.16]

「男性は女性を軽蔑しているので、一人で食卓に座り、その後で母、姉妹、妻など女性たちが集まり、残り物を食べる」。[p.16]

「男性は女性を軽蔑しているので、宦官、監視者、召使といった、女性の名誉⁸⁾を守る番人を彼女に付ける。その者は女性を見張り、彼女が向かう所はどこでも一緒に行く」。[p.16]

「男性は女性を軽蔑しているので、女性を家に閉じ込め、女性が家から出るのは棺台に乗せられて墓に運ばれる時だけだと自慢する」。[p.17]

「男性は女性を軽蔑しているので、女性には信頼や誠実さが欠けていると公言する」。[p.17]

「男性は女性を軽蔑しているので、女性に公的な生活やそれに関わる事柄について一切の行動をさせない。すなわち、女性は行動について何の意見も持たず、嗜好についての考えもなく、芸術の好みもなく、公益には何の関係もなく、宗教的信条にも関わりなく、愛国心も宗教コミュニティへの感情も持たないのである」。[p.17]

「エジプトの女性の状況は最近までこのようであったと言っても過言ではない。最近では男性の考え方の進歩と彼らを支配する権力が緩やかになったために、男性の女性に対する支配が幾分か弱まった。女性たちが自分の用事をするために外出するのを、また外の空気を吸ったり、創造主が男であれ女であれ全ての人間の目に示してくださった被造物を眺めて気分転換したりするために公園に通うのを、よく見かけるようになった。多くの女性が夫と共に外国へ旅行に行くようになり、多くの男性が家庭生活において女性にある程度の地位を与えている」。[p.17]

「これは一部の男性たちの心に女性への信頼、安心が芽生えたからに他ならない。それは女性を新たに尊重することである」。[p.18]

この変化には批判すべき面があるが、その批判の原因は実はこの変化を取り巻く諸状況なのである。それらの中で「最も重要なのは大多数の人々の心にヒジャーブ (hijāb)⁹⁾の習慣が根付いていることと、女性の教育が不足していることである。女性の教育が宗教の原則と道徳の原則に基づいて完全なものになり、ヒジャーブがイスラームのほとんどの学派で認められる限度に留められたなら、このような批判は全てなくなり、国は全ての男女を役に立てることが出来るだろう」。[p.18]¹⁰⁾

8) 'irdであり、この語は特に女性に関して用いられ、貞操の意味合いが強い。

9) アミンがここで意図するヒジャーブは、衣服としてのヴェールおよび女性の隔離である。p.27では、カーテンの意味に用いている。

10) 序については、Abū Hamdān [1993 : pp.157-70] による抜粋・引用が特に目立つが、Drewes [1966 : pp.55-56]、Mazid[2002 : pp.44-46,49,60]、Abdel Kader [1987 : pp.21,59]、Ahmed,J. [1960 : pp.47-50]、Bisīṣū [2001 : pp. 64,67,76] ほかにも多数引用・利用されている。

(IV)

女性の教育

「女性、女性が何であるかを何があなたに知らせるか。男性と同様、人間である。女性は単に性別の違いを除けば、体の器官や機能も、感覚や思考も男性と違いがない。人間が人間であるという事実に必要な全てのことに於いて男性と違いがない」。[p.19]

「男性が肉体的、理性的能力において女性に勝っているとするならば、それは何世代にもわたって男性が体と頭をいつも使ってきたのに対し、女性は上記の二つの能力を利用することを禁じられ、時と場所によって強弱の程度は違いますが、劣等の状況に在ることを強いられてきたからに他ならない」。[p.19]

「我が国の人々は今なお女性の教育は必要ではないと信じている。それどころか、女性に読み書きを教えることはイスラーム法で許されるのか、それとも法に従えば禁じられているのかと問うている」。[p.19]

ある父親は、自分の娘は役所の仕事に就けるわけでもないのだから、彼女には家事に必要な裁縫や料理、アイロンがけ等しか教えないと言ったが、これだけで十分だという考えは間違っている。[p.20]

「私の意見では、女性はある程度の理性的・道徳的知識を得てからでなければ家を切り盛りすることが出来ない。少なくとも男性が初等教育で習うべき全てのものを習わなければならない。そうすれば、女性は学問の基礎を知り、その後自分の好みに合うものを選び、好きな時にそれを取り上げて極めていくことも出来る」。[p.20]

「女性が読み書きを習い、科学的真理の原則を学び、国々の位置を知り、諸国の歴史を見回し、天文学や自然科学の何がしかに興味を持ち、それら全てを自身の中で生かすことが女性の宗教的な信条や道徳の認識となった時、女性の理性は健全な意見を受け入れる準備ができ、今女性たちの理性を破壊している迷信や馬鹿げた事柄を捨て去るだろう」。[p.21]

「女性の教育を担う者は、彼女に幼少期から徳を愛する習慣を身に付けさせねばならない。人間の心を完成させる徳、家族への接し方や親族関係の秩序の維持に影響のある徳、国の秩序に影響が現れる徳で、こうした徳の全てが女性の心に根付く特性になるためである。それは言葉による指導か適正な模範によってしか出来ない」。[p.21]

「これこそが、私がエジプト女性に受けてもらいたいと望む教育である。(中略) このような教育がなければ女性が社会や家庭での役割を果たすことは出来ないと思

تربية المرأة

المرأة وما ادراك ما المرأة . انسان مثل الرجل .
لا تختلف عنه في الاعضاء ووظائفها ولا في الاحساس ولا
في الفكر ولا في كل ما تقتضيه حقيقة الانسان من حيث
هو انسان اللهم الا بقدر ما يستدعيه اختلافهما في الصنف
فاذا فاق الرجل المرأة في القوة البدنية والعقلية فذلك
لغالبه اشتغال بالعمل والفكر اجمالا طويلا كانت المرأة
فيها عرومة من استعمال القوتين المذكورتين ومتبورة على
لرؤم حالة من الانحطاط تختلف في الشدة والضعف على
حسب الاوقات والاماكن
ولا يزال الناس عندنا يستقنون ان تربية المرأة وتعليمها
غير واجبين . بل انهم يسألون هل تعلم المرأة القراءة
والكتابة مما يجوز شرعا او هو محرم بمقتضى الشريعة!

『女性の解放』初版 p. 19

う」。[p.21]

１：社会での（女性の）役割に関して

「どの国においても女性は少なくとも住民の半数と見積もられるので、女性が無知に留まるなら、それは国の半数の働きを利用出来ないということであり、明らかに大きな損失である」。[p.22]

「エジプトの女性が西洋の女性のように科学、文学、美術、商売、工芸に携わることを妨げているのは、その無知と教育への無関心に他ならない」。彼女らの知力・体力を社会に向ければ富を産み出し、エジプトにも有益である。[p.22]

「今の我々はまるで、大資本を持ちながらそれを箱に入れ、毎日箱を開けては黄金を見て楽しむだけで満足している男のようである。もしも彼がよくわかっているならば、その資本を利用・運用して数年の間に倍にすることが出来るだろう」¹¹⁾。[p.22]

多くの人が自分に必要な仕事を持っていないことは、人間社会の弱体化の要因になる。
[p.23]

「女性は理性を使い、意志を持つ人間になるために教育を必要とする」¹²⁾。エジプトでは女性に男性の保護者がいて世話をしてくれると言われるが、「実際のケースは多くの女性に扶養してくれる男性がいないことを示している。親族を失った未婚の娘、離婚した女性、夫をなくした女性、息子たちのいない、もしくは幼子たちを持つ母親、ここに挙げた女性たちは皆、自らの必要を満たすことが出来るように、また子供がいるなら子供たちの必要を満たすことが出来るように教育を必要としている。知識を得られないために、道徳に反する手段で糧を求めたり、親切な家庭の世話になったりするしかないのである」。[p.23]

わずかな金銭が必要なために売春することを余儀なくされている女性もいる。[pp.23-24]

エジプトの家庭は、外で働く能力がない多くの貧しい女性を養わなければならない、このことが家庭の経済的基盤の維持を阻害する要因の一つと考えられよう。[p.24]

自分と子供たちの生活費を稼ぐために働くエジプト人男性は、稼ぎの一部を、飢えた親族や知人ほかのために使うが、両者の差は、後者が無教育ゆえに能力の用い方を知らないことから生じる。[p.24]

女性に保護者がいて養ってくれるとしても、その負担を助けるために教育が必要ではなかろうか。女性が裕福だった場合も、教育は自己資産の管理に役立つのではなかろうか。[pp.24-25]

自分の財産を親戚か他人に預けざるを得なかったり、代理人に食い物にされたりする女性がいる。[p.25]

また、契約書などの内容を理解できずに印鑑を押し、夫や親族、代理人に自分の権利を奪われる女性もいるが、女性に教育があれば、このようなことが起こるだろうか。
[p.25]

「教育はそれ自体、どんな場合にも人間の生活に必要なものの一つであり」、学問は

11) エジプト人女性を箱の中の黄金に譬えたもの。

12) Bahā' al-Dīn 版 [p.33] では、この引用部だけで一つの段落を形成し、次の文からは引用部も含めて新しい段落になる。

人間を高める唯一の手段である¹³⁾。[pp.25-26]

「神の法、人の法は男性と同様に女性に向けても語られたものであり、美術、工芸、発明品、高度な哲学、これら全ては男性と同様、女性も惹きつける。いかなる高邁な心も、現世と来世の真理と幸福を求めて、それらを見たい、その宝を楽しみたいと憧れずにおられるだろうか。この憧れに、男女のどんな差があるのか。子供たちは出会ったあらゆる事柄について尋ね、目にした出来事の原因を知ろうとするが、それは男女等しく、その熱意は女子が男子に勝るかもしれない」。[p.26]

「感受性の高い心は、翼を切られ、頭を垂れ、眼を閉じて、鳥籠の中の生活に満足するだろうか。果てしなく広い空間が自身の前にあり、空が上にあり、星々が目を楽しませ、存在の魂が囁き、自身の秘密の宝を開きたいとの望みや願いが吹き込まれているというのに」¹⁴⁾。[pp.26-27]

「イスラーム法の定めは、女性が男性と同様に理性を与えられたことを示している。偏見に囚われない男性は、神が女性に理性を与え給うたことを無駄になされたと思うだろうか。神が女性に感覚や知覚を与え給うたのは、それらを見出し、使わないためだと思うだろうか」。[p.27]

「ムスリムたちは、女性は女部屋の主であり、家にいるものだ、女性の役割は家の敷居までで終わるのだと言う。それは空想の世界に住む者の言であり、向こうが見えないカーテン (hijāb) によって真実から隔てられているのだ」。[p.27]

ムスリムたちがよく考えればわかることだが、「女性が第一の義務、即ちこの生活に必要なものを自分の手で得ることから免除されていることこそが、女性の諸権利の喪失を引き起こした原因である。男性は全ての事柄に責任があるので、全ての権利を享受する権利を独占した。女性に残ったのは、ペットが飼い主の慰めとなることで気に入られ、必要なものを十分に与えられる程度の運だけだ」。[p.27]

エジプトでは男性による女性の支配が続き、「男性は女性の面前で生活と所得の扉を閉ざし、女性が自活する手段を得られないようにした。女性の前に残った道は、妻か売春婦として他者によって生活することだけであった」。[pp.27-28]

「理性も有益な働きも女性にとっては価値がなくなり、女性の売り物は男性を喜ばせ、体で男性を好きにだけ楽しませることとなった時、女性は男性を惹きつけその歓心を買うために様々な手を尽くすことに全力を注ぐようになった」。[p.28]

このように女性は長い間、正しい教育で理性や思考力をつけることがなかったので、理性ではなく感覚や好みで判断し行動するようになってしまった。理性や徳が育てられていたなら、その力が感覚に勝り、知恵の原則と道徳の原則に従った行動をしていただろう。[pp.28-29]

女性はこうした過去の時代に良識を失い、正しい行動がとれなくなり、主人であり保護者である男性に対して策を弄するようになった。その狡さはこの上ないほど向上し、名女優のように変幻自在になったが、所詮、雌狐のペテンに過ぎない。[p.29]

「しかし女性に非はない。なぜなら女性は自由ではないからだ。女性が自由を失ったのは健全な識別能力を失ったからである。非はすべて男性にある。我々の前の世代で女

13) Bahā' al-Dīn 版 [p.35] では、後半 (学問は・・・) が新たな段落になる。

14) 現状のエジプト人女性、特に中・上流階級の女性を鳥に譬えたもの。

性の教育を怠った男性たちのことである」。¹⁵⁾ [p.29]

2：家庭での（女性の）役割に関して

「考える人間なら誰でも自分の家庭の状況を注意深く見るだけで、今の状況がこのまま続けば耐え難いことになることを確信できるだろう」。^[p.30]

今も様々な出来事が心に浮かぶが、これらの出来事の全てを引き起こしたものは一つのこと、つまり「貧乏か裕福か、階級が低いか高いかに関わらず、全ての家庭に蔓延している病であり、それは女性の無知である。我が国の女性は、望ましくないことに、無知という点で平等である。女性の違いは、服装や装飾品にしか現れない。むしろ、女性の生活レベルが高くなる度に彼女の無知は増し、田舎に住む最下層の女性が彼女の状況の割に最も理性的であるとさえ言えるだろう」。^[p.30]

「農民の女性は農民の男性が知っていることを全て知っている。農民の男女の知力の程度は同じで一方が他方に勝つことはほとんどない。しかし、上流、中流階級の女性は男性より大きく遅れていると考えられる。それはこの階級の男性たちは理性を育て、学問で啓蒙されているが、女性たちはこの動きについていけず、途中で立ち止まっているからで、この違いが男性と女性双方の不幸の最大の原因である」。^[pp.30-31]

教育のある男性は、整頓された自宅を好み、嗜好が洗練されており、愛する思想や敬慕する祖国を持つ。そして、誰かと共に喜び、悲しみ、語り合うことを求める。ところが、「自分の妻が無知ならば、喜びや悲しみを彼女に隠し、やがて、自分は一人だけで或る世界に、妻は別の世界にいるのを見る。彼女はというと、男性がこの世に創られたのは、自分に高価な布地や貴重な宝石を買ってくれるため、自分を楽しませるのに時間を使ってくれるためだと考える」。^[pp.31-32]

「男性は自分の妻がこのように無知であるのを見ると、心に妻への軽蔑が生まれ、自分には何の影響ももたらさない、取るに足りないものだと考える。彼女は彼が無視し注意を払わないのを見ると、心を痛め、自分は不当な扱いを受けていると思う。自分の価値を認めてくれない男のところに來た不運を嘆き、心に憎しみが芽生える。その後、地獄の罰もこれほど酷くはないと思われるような暮らしが始まる。互いが相手を自分の幸福を妨げる敵と見る暮らしである」。^[p.32]

それはその男女の性根が悪いからではなく、二人の教育が異なるからである。教育に差異のある夫婦は、真の愛で結ばれる方法がない。「この世に男女間の愛の喜びが失われることに匹敵する損失はない」。^[pp.32-33]

「天啓の書に書かれた宗教的な物語に、神はイブをアダムの肋骨から創られたとある。私が思うところでは、それは男女が両者の統一によって初めて生じる一つの集合体を形成するということの素晴らしい象徴である。この意味から西洋人は女性を男性の半分と呼ぶが、それは正しい表現であり、男女が一つの体の半分ずつであること、両方合わせて完全になるために互いを必要とすることを明確に表している」。^[p.33]

神が全生物に与えた、雌雄が互いに引き付け合うこの力こそが、愛を構成する最も重要な要素であり、この力によって、男女は前世で別れた後、捜し求めている相手を見つ

15) 1章の1節までは、Sakākinī[pp.74-78]や Bisīṣū[pp.63, 65, 68, 71, 77]などによる多くの抜粋・引用があるほか、Abdel Kader[pp.37-38,42-43,59]、‘Imārah[1988: pp.47,99,108,129-30]、al-Dusūqī[2004: pp.40-41]、Cole [1981: pp. 400-01]、Hātim[pp.113-14] などによる引用・利用も目立つ。

けたかのように惹かれ合う。[pp.33-34]

しかし物質的な引力はやがて弱まる。その愛を維持させるのは神が人間に与えた魂の輝きと理性の煌きである。一時的で感覚的な快楽と永続する精神的・理性的な快楽を交換してしまう人が多い。「美しい顔、黒い瞳、優美な姿、長い髪」に、「優しい性格、繊細な嗜好、輝く聡明さ、抜けるような理性、広い知識、手際の良さ、仕事の巧みさ、秩序を守ること、内面と外面の清潔さ、思いやりのある心、正直な言葉、純粋な良心、大きな信頼、誠実な献身」が加わった方が愛は増す。このような精神的な徳は、理性的な人々にとってすべての肉体的な美点に勝る。そして「この二つの要素から完全な愛は成り立っている」。[pp.34-35]

女性を精神的にのみ愛した男は夢想家で、女性を肉体的快楽のために愛した男は好色家である。[pp.35-36]

肉体的な快楽はどれも同じである。[p.36]

それは繰り返されると、刺激がなくなる¹⁶⁾。他方、精神的な快楽は、「性質上、いつでも更新できる。二人の友達の語らいを注意深く見れば、この快楽は消えることのない喜びの宝庫であることがわかるだろう」。一方が知識や教養、感性を与えられれば、それらは全てもう一方の心にも新しい快感として反映され、二人の間には新たな強い絆が生まれる。[pp.36-37]

「ここから、真の愛の人間への支配力がどの程度か、また、知者がその気高い愛の発見をこの世で最大の幸福の一つとみなすのがどのようなことかがわかる。財産が人生の飾りだとすれば、愛は人生そのものである」。[p.37]

「男女間に教育における釣り合いがなければ、この愛は両者間に存在しえない。(中略) 真の愛は、尊敬がなければ続かない。尊敬はその対象となる相手の価値を知っているかどうかにかかっている。無知な女性は夫の価値を知らない」。[p.37]

「結婚している人々に、自分たちが妻から愛されているかと尋ねてみよ。彼らは勿論だと答えるだろうが、実際は彼らが思っているのとは違う。私は申し分なくうまく行っていると言われる多くの家庭を調べたが、今まで、妻を愛している夫も、夫を愛している妻もいなかった。多くの家庭で見られるこの表面的にはうまく行っていること、その意味は夫婦間に不和がないということであり、それは夫が疲れて何もしないか、妻が夫を王様のように勝手にさせているか、両者ともに人生の価値を知らない無知であるかのいずれかのためである。この最後の状態がエジプト人夫婦の大半である。私の見るところ、幸福に近いものはこの最後の種類にしかない。それも、価値のない消極的な幸福でしかないのだが」。[pp.37-38]

これはまだ幸せなほうで、最初の二例では一方が他方の犠牲になっている。基本は夫の側の愛の欠如で、妻が理性と教育において劣るため夫と精神的に共有するものがないからである。「妻は自分が家事のために生まれてきたと考えるが、夫はそれを見て喜ばない。ほとんどの女性は櫛で髪を毎日梳かないし、一週間に一度しか入浴しないし、歯を磨く木切れの使い方を知らない。女性は下着の質と清潔さが男心を掴むことに大きな影響があるのに、下着に関心を持たない。また、夫の欲望をいかにして生み出し、維持し、高め、満足させるかを知らない。なぜなら、無知な女性は、内面の精神活動を知らず、

16) Bahā'al-Dīn 版 [p.42] や 'Imārah 版 [1989 : p.336] では、ここまでが一つの段落をなし、次の文以下は新しい段落になっている。

好き嫌いが起こる原因がわからないからである。そのため、彼女が男性を引き付けたいと望む時、大抵その逆をしてしまう」。[pp.38-39]

女性の側の愛の欠如は愛の意味を知らないためで、女性の夫への気持ちを分析するなら、「それは二つの事柄から成り立っていることがわかる。自分の欲望を満たすことを許された男性であることから生まれる夫への愛着と、この男性が生活に必要なものを賄ってくれるので役に立つという気持ちとで」あり、何千ものの中から選ばれた二つの魂の融合、母性愛のような完全な誠実さとはかけ離れている。[pp.39-40]

「エジプト人妻はどんな場合も、夫の背が高いとか低いとか、色が白いとか黒いとかしか知らない。夫の理性的、教養的価値、経歴、純粋な良心、繊細な感覚、知識、成し遂げた仕事、人生の目標、人格を作り上げてきた事柄、それによって社会で尊敬され、愛され、賞賛されるようになったすべての事柄、それらは妻の頭には全く届かず、届いたとしてもその心の中での夫の位置については何の影響も持たない。このように、男性のことを知らない第一の者が妻であるのに、どうして妻が夫を愛すると思われるだろうか」。[p.40]

「我々の女性たちは、名誉ある男性が手を伸ばしてまで握手などしない男たちを賞賛し、我々がその存在を名誉だと考える男たちを嫌う。それは無知な女性が自分の理性の範囲で男性を判断するからである。女性にとって最良の男性とは、昼も夜もずっと自分の相手をしてくれ、自分が欲しい服や宝石や菓子にいくらでも金を払ってくれる男性である。女性にとって最も嫌な男性とは、職場の仕事で時間を過ごす男性である。女性は男性が背中を丸めて座り読書に没頭しているのを見る度に、彼に腹を立てる。そして、これらの時間を自分から奪い、自分が夫に対して獲得した権利を掠め取る書物と学問を呪うのである」。その結果、「哀れな夫は妻と学問というこの二つの敵同士との融和を図るためには、どうすれば良いのかわからない」。[pp.40-41]

このような状態では男性は仕事への意欲を失ってしまう。学問には心の平静さが必要であるが、妻はそれを与えがたらない。[pp.41-42]

これらのことから、エジプトでは教育があり有益な活動に従事する男性の妻ほど愛情を感じていないことがわかる。[p.42]

私の言う愛は完全な幸福の要素ではあっても、結婚に不可欠なものではなく、女性は共同生活者として助けとなればそれで良いと言われるかもしれないが、女性が無知であるならそれは可能だろうか。[p.42]

前述したように「農民の女性は無知ではあるが、男性の仕事の全てにおいて彼のパートナーである。家の仕事をし、夫の手伝いをする。それは簡単なことだ。なぜなら田舎の生活は概ね単純で簡素であり、家庭の必需品も少ないからである。一方、生活が進歩し、必需品が多くなり、利益を得る方法が多様化し、家の管理が大きな役所の管理と同程度に達した都市では、家政の手綱を握る女性は教育なしでは家を切り回すことが出来ない」。[p.42]

「事実、家政は様々な多くの知識を必要とする、広範囲にわたる技術となった。妻は遣り繰りが出来るよう収入と支出の予算を立てて家計に綻びが出ないようにしなければならない。使用人を監督し、一瞬も監督を怠らないようにしなければならない。そうしなければ、彼らはきちんと仕事をしない。妻は家を夫が好むような場所にして、夫が戻ってくればそこに憩いと幸福を見出し、そこにいるのが心地よいように、気持ちよく食べたり飲んだり眠ったりできるように、そこから逃げて近所や公共の場で時間を過ごし

たがらないようにしなければならない。妻はまた、これが第一で最も重要な義務であるが、子供の体と理性と道徳を教育しなければならない」。

ところが、無知な女性はいくつかの義務の中でも特に子育てに関する知識を持ち合わせていない。

我々は子供が両親から生まれ、母親が出産で大役を担っていることを忘れすぎている。神は全てのことがお出来になるのだが、世界に規範を、生活に秩序を、生き物に法を創られた。人類の歴史はこれらの規範とその継続を確認してきた。

その英知の最たるものは、人類を含むいかなる生き物も、その種に特有の性質、その両親の性質を受け継いでいることである。

知性は脳の機能であり、持って生まれたものを育てるに相応しい教育と栄養が必要である。つまり男女を問わず子供の人格は遺伝と教育の二つの要素による。

遺伝によって子供は両親の血筋から良くも悪くもその素質を受け継ぐ。そして教育により感覚が育ち、十分な知識を与えられると、物事に動じないバランスの取れた人間に育つ。

健全な理性は良い遺伝と良い教育によってのみ完成する。

子供に親の悪い素質が遺伝しても、教育によってその素質は改善され、新しい素質が子孫に引き継がれる。一方、教育が悪ければ、悪い素質が強化され、良い素質は消滅してしまう。

ガザーリー (al-Ghazālī)¹⁷⁾ が述べるには、無垢な子供は習慣の善し悪しで幸福にも不幸にも育ち、この責任は保護者にある。

「教育は一つのことに限定される。子供を良い行いに慣れさせ、子供に良い性格を身に付けさせることである。その方法の一つ、子供がこのような道徳の影響を身の回りで見ることであり、模倣は子供の本能であり、それによって子供は必要な知識を全て身に付けるからだ。母親が無知であれば、子供がその小さな理性と大きな欲望の導くままに行動するのを放置する。子供は良き道徳に相応しくない行いを目にし、結果として、墮落した道徳を身に付け、善からぬ習慣に慣れていくのである」。

それは年齢が進むにつれ固定していまい、大人になってから矯正しようとしても難しい。

「周知のように、子供が幼い時から判断のつく年齢になるまで暮らすのは女性たちの中である。子供はいつも、母親や姉妹やおばたち、使用人の女たち、仲間の女たちに囲まれていて、父親を見るのは時たまである。この生育環境が良ければ教育は良いものとなるし、悪ければ教育は悪いものとなる。無知な母親は子供の心を立派な性格に染めることは出来ない。それを知らないからである。子供の心に悪しき欠陥の種を自らの手で撒かず、悪い性格を植えつけなかったとしても、せいぜい子供が目にする悪しき欠陥を拾い集めるのを放置するのが落ちである」。

「母親が子供の清潔をおざなりにして、子供が汚くしていること、また、子供が道や路地をうろついて、動物の子供のように土の中で転げ回るままにさせていることは、衛

17) Abū Hāmid Muḥammad al-Ghazālī (1058-1111) のことで、彼はイスラーム史上最も偉大な思想家の一人とされ、ラテン語では Algazel と呼ばれる。ガザーリーが以下に述べる内容は、彼の主著『宗教諸学の再興』*Ihyā' 'ulūm al-dīn* の第3巻「精神の鍛練、道徳の修練、心の病の治癒」*Kitāb riḡāḡat al-nafs wa-taḡḡīb al-akhlāq wa-mu'ālaḡat amrāḡ al-qalb* に見られる。

生観念についての母親の無知から来るのではないか。子供時代は怠惰を知らない、活発に動き回るはずの年頃であるのに、子供が何かをすることから逃れ、資本である時間を無駄にして横になったり眠ったり遊んだりして怠惰にしているのを放置しているのは、母親の無知から来るのではないか。我々が皆、或ることがどれほど立派でも醜くとも、何も影響されないほどにまで神経が麻痺してしまい、その結果、立派な行為を見ると口先だけで賞賛し、醜い行為を見ると頭を横に振るか声に出すかして非難するだけで、前者の行為に向かわせ後者の行為から遠ざけようと我々を強いる、心の中の覚醒を感じないのは、母親の無知の影響から来るのではないだろうか。女性がジン (jinn) や悪霊 ('afārū/'ifrīt) で子供を怖がらせて躰ける方法をとること、子供を害から守るために、お守りを付けさせたり、墓地や聖者廟に連れて行って参ったり、そのほか、宗教の根本や有徳の行為を知らない者たちだけが注意を払うことを行ったりすることは、母親の無知から来るのではないか。[pp.49-50]

「我々の間では母親は子供の教育がうまく出来ないということになっており、何某は女が育てたと言え、軽蔑と行いの悪さの例えとなっている。しかし、西洋の国々では女性による教育は男性による教育に勝っているのである。一番良い教育を受けた人々とは運命の助けにより女性がその教育を担った人々なのである。これは不思議なことではない。女性は自然の本能において男性より優れているからである。それによって女性はいくく教育する能力がより強いのである。それは、女性は愛するものへの忍耐力が男性より強く、接し方がより優しく、感情や感覚がより繊細であるからだ。哲学者ルナン (Renan) や作家ドーデ (Daudet)¹⁸⁾ も著書の中で、女性に影響を受けたことを誇る。[pp.50-51]

我々の預言者も、耳学問をした女性であるアーイシャ ('Ā'ishah)¹⁹⁾ から学ぶようにと人々に言われた。[p.51]

「我々の教育の問題こそが、あらゆる問題の母であり、それ以外の問題はいかに重要であろうと全てその中に含まれるということを全エジプト人にわかってほしい」。[p.52]

エジプトで慣習や道徳とされるものは宗教や理性に合致したものではない。[p.52]

「私が思うには、我々の精神の教育の時が来たのだ。正しい確固たる科学的な教育であり、適切な学識と明晰な判断力を備え、知識と道徳、学識と行動を合わせ持った男性を育てる教育であり、毎日、あらゆる言語で外国人が我々に批判を投げつける全ての欠点から我々を救う教育である。これらはどれも名前こそ違っても、同じ一つの原因に帰する。それは我々の精神の教育の不足である。エジプトの全有識者の意見が一致しているように、教育こそこの病の唯一の薬である。この正しい意見が書物や新聞、集会での話題で広まり、世論と言ってもよい位になった。そこから国の未来は教育にかかっているという感情が生まれた」²⁰⁾。[p.52]

私の見るところでは、「人々の関心は教育に向けられているが、精神の教育に向けて

18) ルナンは Ernest Renan (1823-92) で、フランスの思想家、宗教史家。ドーデは Alphonse Daudet (1840-97) で、フランスの小説家。

19) 'Ā'ishah bint Abī Bakr al-Ṣiddiq (614 頃 -78) で、預言者ムハンマドの妻。

20) この段落と次の段落 (p.53) は、アミンの『女性の解放』への反論であるタラアト・ハルブ (Tal'at Harb) の『女性の教育とヒジャーブ』*Tarbiyat al-mar'ah wa-al-hijāb* (1899) にも引用され [2003 : p.43]、女子教育は男子教育の後だという点以外は、賛成の意を表されている [pp.43-44]。

いる者は誰一人いない。また、教育への熱意は男子の教育に限られている。しかし、道徳の躰けは教育に先行し、女子教育は男子の教育に先行すべきものなのだ」。^[p.53]

「私は教育における女性と男性の平等を求める者ではない。それは必要がない。私が今求め、そしてその要求をためらわないのは、少なくとも初等教育においてこの平等があることであり、男子の教育に関心が払われるように、このレベルまでは女子教育にも関心が払われることである」。^[p.53]

「今一部の女子が習っているものは十分ではないと考える。彼女たちはアラビア語や外国語の読み書き、ある程度の裁縫と刺繍と音楽を習い、学問については目を引くほど有益なことを習っていない」。彼女たちはこうした知識で自惚れ、自分が偉くなったと思ひ、謙虚に家事をしようともせず、小説や物語を読んで時を過ごし、手に持った煙草の煙を見つめながら、空想の世界に遊ぶのである。^[pp.53-54]

「今教育があると言われる女性の知っていることはせいぜい読み書きであるが、これは教育の手段の一つであり、最終目的ではない。残りの知識は若い頃に覚え集めた殻に過ぎず、一つずつ抜け落ちていき、結局は何も残らない」。これらの無駄な知識は、理性を豊かにし、空想を追放する科学的真理ではない。空想に対峙できる実用的な理性の獲得ほど、人間にとって有用なものはない。人間は空想を排除する度に、幸福に近づき、真実から遠ざかるほど、幸福からも遠ざかる。^[p.54]

真実の追究こそ人間の目標であり、女性も男性と同様に真実を知り、健全な理性を得る必要がある。^[pp.54-55]

幼児は感情に支配され、理性が弱く、知識が少ないが、無知な女性も幼児と同様である。^[p.55]

「男性は女性を信頼しなくなり、女性が悪魔 (ibris) の手先だと信じている。聞こえてくるのは、女性の人格を批判し、理性を見縊り、女性の狡さを警告する言葉ばかりである。私は今の女性はこうした形容を免れないとは思ひが、その責任は女性ではなく男性にあると考える」。^[p.55]

「我々は女性の状況を改善するために何かしただろうか。理性や法が我々に課している、女性の精神の教育や道徳の躰や理性の教化をしただろうか。女性を家畜と変わらない状況に置いておくことが許されるのだろうか。我々の国の半分が無知の闇の中で生活し、残りの半分の下にあつて、クルアーンに『彼らは聾啞、盲目で、何も悟らない』²¹⁾とあるように、身の回りで起こることを何も知らないのは正しいだろうか。彼女らの中に我々の母、娘、姉妹、妻がいるのではないのか。彼女らはこの世での我々の生活の飾り、分かちがたい部分であり、我々の血は彼女らの血、我々の肉は彼女らの肉からできているのではないのか。男性は女性から、女性は男性からでき、彼女らは我々で、我々は彼女らではないのか。女性が不完全なら男性の完成はあるのか。女性なくして男性は幸福なのか」。^[pp.55-56]

「我々はこの世で最大の喜びを自身に禁じている。それは身内の女性との愛情を享受することである」。^[p.56]

男友達との語らいは相互理解があるので喜びである。女性たちとの間ではこれがなく、彼女らへの愛は不完全である。^[pp.56-57]

21) クルアーン 2 章 171 節。

人は愛し愛される必要があり、母や妻の愛は神の恩寵である。この純粋な愛情は、生活の牢獄にいる我々を癒し、苦痛を和らげてくれる。それゆえ、女性への無関心は神の恩寵に背くことになる。[p.57]

我々は教育が女性の道徳を損なうという通念に立ち向かわねばならぬ。[p.57]

「男性の頭には女性の教育と貞節は両立しないという考えが根付いている。そのことについて昔の人々は長々しい話、不思議な物語、愚かしい逸話を述べており、女性の理性の足りなさ、欺瞞や企みの性向の証拠としている。女性が教育を受けるならば、その教育は女性が巧みに企んだりごまかしたりすること、すき放題なことをすることにしか利用されないというのだ。それで、我々は先人たちの例に倣い、教育が女性の狡猾さの熟練度を増し、邪悪な天性を強めて悪事を犯す新たな武器を与えるのだと信じている」。

[pp.57-58]

今の女性は理性が足りず、多くの策を弄しているのは事実だが、それは女性が長い間無知と劣等の中で生活してきた結果であり、その原因が消えれば、自ずと変わる。「教育が女性の道徳を損なうということについては、我々はそれを否定し、その否定を力説する。教育は、特に道徳の躰を伴うなら、女性を引き上げ、女性にその本来の地位と評価を取り戻させ、女性の理性を完成させ、女性が自分の行動について考え、熟慮し、思索することを可能にする」。女性に読み書きを教えたら恋文を書くというが、多くの無知な女性はすでに召使らを愛人との仲立ちに使っていた。[p.58]

「事実、心の清さは本能と天性にある。女性が高潔であれば、その学識は自身に高潔さを増し、自身が強くなる。女性が不道徳であっても、学識はその不道徳さを増しはしない。これは男性の場合にも当てはまる。ある種類の教育によって一部の人が惑わされることがあっても、それはその教育の実施を禁じるものではない。神はクルアーンの中で『主はこんなことで多くのものを惑わし、また多くのものを導きたまう』²²⁾とおっしゃられた」。[pp.58-59]

教育は有害ではない。「教育を受けた女性は無知な女性よりも物事の結果を怖れるものだ。自分の評判を傷つけるようなことに容易く手を出したりはしない。無知な女性の道徳が思慮に欠け軽々しいのとは違う」。その例として、「ヨーロッパの女性は概して、内心の状態がどうであれ外見を守る」。(中略)「男性から目を伏せ、彼らを見るときも目の端でちらっと見る。一方、我々の貞節な女性たちは、その内心は外見より善良なのであろうが、彼女らの一人が男性を見かけると、彼をじっと見つめ、顔を向けて、首を曲げてまで彼の方を向く。彼女は無意識に自分のそうした行動が自身の地位を貶め、自分自身の価値と尊厳を低下させることに全く気付かない」。我が国のふしだらな女性たちは言わずもがなであるが、外国人にとって両者の区別はつきにくい。[pp.59-60]

「我々の国の女性たちの精神が慣れ親しみ、彼女らの生活に必要なもののごとくなってしまった怠惰こそ、悪行の母なのである。女性が家で何もせず、何も作らず、芸術も知らず、学問もせず、書物も読まず、神に祈りもしないなら、その時に彼女らは何をするだろうか。周知だが言おう。金持ちや貧乏人、学のある者や無知な者、主人や使用人に関わらず、彼らの妻の関心事は一つの事柄であり、それは終わりなく枝分かれしていき、いつ何時でも新しい形をとる。それは状況に応じて彼女の満足と不満の源泉である。

22) クルアーン 2 章 26 節。

その事柄とは夫との関係である。ある時は夫が自分を嫌っていると想像し、ある時は夫が自分を愛していると思う。時には夫を隣近所の女性の夫たちと比較し、夫は勝つか負けるかしてこの難しい試験から抜け出る。時には妻は夫の気持ちを試し、彼が変わったのかまだ誓った時のままなのかを知ろうとする。時には親族への愛情が深い夫からその愛情を奪うために心を変えさせる手段を講じたりする。使用人の女性への夫の態度の監視を怠らず、女性の訪問客が入ってくる時には監視し、常に疑いを持つ。用心のために、姿が良くなり見た目が悪い女性の使用人しか受け入れない。そうすると妻の心は落ち着き、夫が使用人に関心を向けることから安心できる。こうした心配の種から解放されるのは、同様の話がもう片方の耳に入ってくる時だけである。種々の表現で心配事をすべて描き切ると、再び心配事を想像の中で描くという具合である。そのため、隣人や友人たちと集まればタバコの煙とコーヒーの湯気と共にため息が上がり、声が高くなる。自分と夫、夫の親戚、夫の友人たちとのこと、自分の悲しみ、喜び、心配なこと、嬉しいことを話し、心の中のことをすべて出してしまい、秘密は何一つ残らない。寝室に関わることであっても話してしまっている」。^[pp.60-61]

これは女性が夫を愛していた場合である。夫を愛していない女性の関心事は、いかにして今の夫と別れて他の夫を見つけるかであり、また独身の女性の関心事は、どんな夫でも、とにかく見つけることであり、じっくり選ぶこともしない。不道德な女性ならばそれも当然のことで、機会があれば逃さず、男性の資質を探る努力などしない。^[pp.61-62]

「教育を受けた女性の事情は、これとは異なる。運命が彼女たちの上に自分たちでは解決し得ないことを引き起こす時（つまりは結婚の選択をする際）、愛する人の状態や長所や性格を先に完全に知った上で、強い愛情を持つのでなければ、それ（結婚の選択）はありえない。こうして彼女はあらゆる時に見る、何百、何千もの男性の中から夫を選ぶ。彼女は自分に相応しくない人物に信頼を置かないよう気を付ける。また彼女は、葛藤の末でしか自身を引き渡さず、その葛藤の長さや強さは気質によって異なる。彼女はいかなる状態でも、貞節さで外面を覆い、自分に最も近い人々にも心の中を隠す」。^[p.62]

これは前述のとおり、女性が初等教育で学んだ道徳によるのである。読書や家事に馴染み、正しい手本の中で育てば、理性を働かせるようになり、正道を外れることもなくなる。^[pp.62-63]

「要するに、理性と道徳の教育こそが女性を守るのであり、無知が女性を守るのではないと考えられる。いや、この教育はこの国において女性が名誉の価値と名誉を守る方法を知るための最大の手段である。私は妻の無知の利を信じる者は盲人を導く盲人のようなもので、二人の運命は路上で最初に遭遇する穴に落ちることだと考える」。^[p.63]²³⁾

23) 1章の2節については、Sakākīnī [pp.76-78]、Bisīsū [pp.63,69,70,77]、Fahmī [1963: pp.79-81,139]、‘Imārah [pp.78,102-3,112]などに抜粋・引用、Mazid [pp.47-48,50-51,57]、Abu-Lughod [1998: pp.257-59]、Khākī [1973: pp.92-94]、Cole [pp.395,397,399,400]、Abdel Kader [pp.32,38-39,42,59]、al-Dusūqī [pp.41-42]、al-Shaykh [1994: pp.46-48]ほかに引用・利用が目立つ。その他、序と1章を全般的に結構利用しているものに、Hourani [1962: pp.164-65]、Ghuṣn [2001: pp.226-28]、Adamas [1933: pp.232-33]、Hoffman-Ladd [1987: pp.25-27]などもある。また、al-Majlis al-A‘lā li-l-Thaqāfah [2001]、すなわち『女性の解放』出版100年を記念した論文集の、特に第1巻の、「カーシム・アミーンと女性の解放」(Qāsim Amīn wa-Tahrīr al-mar‘ah)章と「ナフダの言説における女性の解放」(Tahrīr al-mar‘ah fī khitāb al-Nahdah)章には、上記のBisīsū、Ḥatīm、Ghuṣnの論文を始め、『女性の解放』の序章や1章に言及した論文が多数掲載されている。

(V)

アミーンは「前書き」において、読者たる教育ある人々にエジプトの改革の必要性を訴える。

「序」においては、エジプト人女性の地位が低いのは、イスラームによるのではなく、力による支配とその慣習が続いてきたためと断言する。例えば、イスラーム法は複婚の問題はさて置き、本来は男女間の平等を重視していたと言う。この見解は彼の師であるムハンマド・アブドゥ (Muhammad 'Abduh) のイスラーム・モダニズムに沿うものである。

アミーンは女性の地位を向上させることなしには、国の状態の改善はありえないと考えるが、これも 19 世紀末以来、エジプトの近代的ナショナリストたちの考えである。

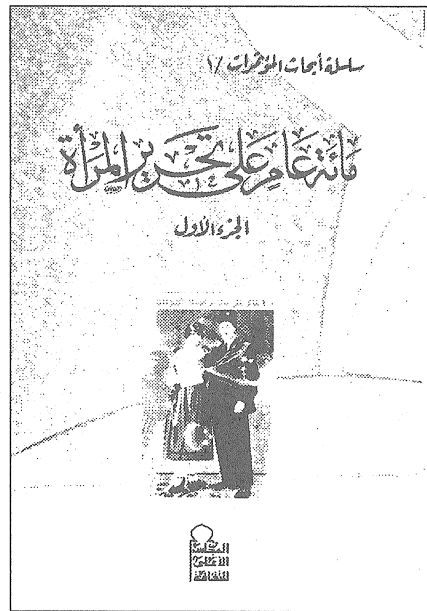
そして、彼は女性の惨状を「男性は女性を軽蔑しているので、・・・」という表現の繰り返しによって際立たせ、最後に、ここ数年は男性の意識の向上により女性に対する男性の支配が軽減したことを認めつつ、女子教育の充実とヒジャーブの改善を提唱する。

「女性の教育」においては、まず男性優位は歴史の産物であり、女性は社会や家庭で自らの役割を果たすために教育が必要であることを表明する。

その上で、エジプトの社会は女性を活用しておらず、ムスリムたちは女性の役割を家庭内に限定し、かつ女性に自活の道を閉ざしていると批判する。

そして、エジプトの家庭には女性の無知という病が蔓延し、特に都市部で目立ち、夫婦関係や子育てなどに支障をきたしており、それを解消するためには、女性にも男性と同等の初等教育を与え、理性と道徳を育成すべきであると主張する。

但し、彼が念頭に置いているのは上・中流階級の女性であり、何よりも、教育のある近代人たる男性たちのためのより良き妻と、国の将来を担う新世代のためのより見識のある母親とを供給するために女子教育が必要だという考え方である。彼が *tarbiyah* という語を多用するのは、女性の育成とその結果としての子供の育成に重点があることを明示している²⁴⁾。また「女性の教育」において「社会での役割に関して」述べた節よりも「家庭での役割に関して」述べた節の方が圧倒的な量を占めるところからも、彼が後者をよ



『「女性の解放」から百年』の表紙

24) 女性の側からも、1888 年にはマルヤム・マカリウス Maryam Makāriyūs (1888 没) が『機知』*al-Laṭā'if* 紙に育児に関する記事を載せ、女性教育の重要性を強調し、女性は育児という大切な務めにとって極めて重要な衛生や栄養に関する技術と知識を得るべきであると説いている。この時期 (19 世紀末葉から 20 世紀初頭) のエジプトにおける育児の重要性については Shakyri[1998] も参照。因みに、Shakyri[pp.131,137-38,149] は『女性の解放』の序の pp.8-10、1 章の pp.43-47、pp.49-50、p.52 を引用あるいは利用している。

り重視していたことがわかる。

すでにタフターウィー (al-Taḥṭāwī)、アリー・ムバーラク ('Alī Mubārak)、アブドゥと
いったムスリム知識人が 1870 年代から 80 年代に女性の教育を唱えており²⁵⁾、女性も初
等教育を受けるべきであるというアミーンの考えは、当時の知識人や官僚たちの間の、
リベラルな見解というよりは、むしろ保守的な見解を表している。『女性の解放』の内
容に反対する急先鋒タラアト・ハルブ (Ṭal'at Ḥarb) でさえこの部分は賛成の意を表し、
アミーンからの引用を行っている²⁶⁾。

アミーンは幾度も、満足からはほど遠いとみなす当時のエジプト人女性たちの生活の
描写を行うが、「序」の女性の惨状の例示も合わせて、これらはステレオタイプのな女
性観であり、女性に対する彼のある種の差別観の表出ともとれる。彼を「エジプト・フ
ェミニズムの父」とする見方が正誤両面を含んでいたと言えるのではなかろうか。実際、
最近の研究者たちからは、アミーンによるこのような女性描写などを批判する声が上が
っている²⁷⁾。

以上のように、彼の女子教育論は、都市部の中流階級以上の女性を対象とした、ナシ
ョナリストによる男性中心主義の「良妻賢母」の考えであるという側面が強いことは否
めない。

25) タフターウィー以下は、前稿註 14 を参照。前稿註 21 も参照。

26) 『女性の教育とヒジャーブ』の残りの部分を通して、ハルブは当時一般的であった風潮を恐らく要約
しながら、女性の本性と役割とに関する彼自身の見解を以下のように表明した。聖書とクルアーンに
も見られるとおり、女性は男性より肉体的にも知的にも道徳的にも劣っている。もしそうでないなら
ば、なぜ女性は何十年もの間、男性の指導権と主権を従順に受け入れてきたのか。女性は教育される
べきだが、もし我々が男性を教育することと女性を教育することとを選ばねばならぬなら、前者が選
択されるべきである。というのは、家族全員の道徳に責任があるのは男性であるからだ。女性は妻と
して、そしてより重要なのは母として、彼女たちの本来の自然な役割をよりよく果たすためにのみ、
教育されるべきである。本註 20 も参照。

27) 近年のアラブ・フェミニズムを代表する Ahmad, L. [1992] は、アミーンを「クロマー Cromer (イ
ギリスの在エジプト総領事) と植民地主義の息子」[p.163] と批判する。そして、『女性の解放』の
pp.38-39[p.157]、pp.40-41[pp.157-58]、pp.60-61[p.158]などを引用し、女性に対するアミーンの憎悪の
例と捉えている。なお、「フェミニズムの父」説は前稿註 1 を、それに反対する説は同註 2 を参照。

【テキスト】

- 初版：Qāsim Amīn, *Tahrīr al-mar'ah*, Cairo:Maktabat al-Taraqquī, 1899, 192p.
 ‘Imārah 版：Qāsim Amīn, “Tahrīr al-mar’ah”, *Qāsim Amīn al-A‘māl al-kāmilah*, ed. Muḥammad ‘Imārah, Cairo & Beirut:Dār al-Shurūq, 2nd.ed., 1989, pp.319-416
 Bahā’ al-Dīn 版：Qāsim Amīn, *Tahrīr al-mar'ah*, ed. Aḥmad Bahā’ al-Dīn, Cairo: al-Hay’ah al-Miṣrīyah al-‘Āmmah li-l-Kitāb, 1993, pp.19-149

【参考文献】

- Abdel Kader, Soha. 1987. *Egyptian Women in a Changing Society, 1899-1987*. Boulder and London:Lynne Rienner Publishers
 Abū Ḥamdān, Samīr. 1993. *Qāsim Amīn: jadalīyat al-‘alāqah bayna al-mar’ah wa-al-nahṣah*. Beirut:al-Sharikah al-‘Ālamīyah li-l-Kitāb
 Abu-Lughod, Lila 1998. The Marriage of Feminism and Islamism in Egypt: Selective Repudiation as a Dynamic of Postcolonial Cultural Politics. *Remaking Women Feminism and Modernity in the Middle East*, ed. Lila Abu-Lughod, pp.243-69. Princeton:Princeton University Press
 Adams, Charles C. 1933. *Islam and Modernism in Egypt: A Study of the Modern Reform Movement Inaugurated by Muhammad Abuduh*. London:Oxford University Press
 Ahmed, Jamal Mohammed. 1960. *The Intellectual Origins of Egyptian Nationalism*. London:Oxford University Press
 Ahmed, Leila. 1992. *Women and Gender in Islam: Historical Roots of a Modern Debate*. New Haven:Yale University Press
 Badran, Margot. 2009. *Feminism in Islam: Secular and Religious Convergences*. Oxford: Oneworld Publications
 Bisīsū, ‘Abd al-Raḥmān. 2001. Fikar Qāsim Amīn fī mir’ah ittifaqīyah al-qaḍā’ ‘alā jamī‘ ashkāl al-tamyīz dīdda al-mar’ah. *Mi’at ‘ām ‘alā Tahrīr al-mar’ah*, vol.1, pp.59-89. Cairo: al-Majlis al-A‘lā li-l-Thaqāfah
 Cole, Juan Ricardo. 1981. Feminism, Class, and Islam in Turn-of-the-Century Egypt. *International Journal of Middle East Studies* 13, no.4 : 387-407
 Drewes, G.W.J. 1966. The Beginning of the Emancipation of Women in the Arab World. *Nederlands-Arabische Kring, 1955-1965 Eight Studies Marking Its First Decade*, pp.47-66. Leiden:E.J.Brill
 al-Dusūqī, Munā. 2004. *Qāsim Amīn: muṣliḥan ijtīmā’īyan*. Beirut:Dār al-Fikr al-‘Arabī
 Fahmī, Māhir Ḥasan. 1963. *Qāsim Amīn*. Cairo:Wizārat al-Thaqāfah wa-al-Irshād al-Qawmī, al-Mu’assasah al-Miḥrīyah al-‘Āmmah li-l-Tarjamah wa-al-Ṭibā’ah wa-al-Naṣhr
 Ghuṣn, Amīnah. 2001. Tazawwajū min-hunna alfan li-anna-hunna ajīrāt. *Mi’at ‘ām ‘alā Tahrīr al-mar’ah*, vol.1, pp.187-259. Cairo: al-Majlis al-A‘lā li-l-Thaqāfah
 Ḥarb, Muḥammad Tal‘at. 1899. *Tarbiyat al-mar’ah wa-al-ḥijāb*. Cairo:Maṭba‘at al-Taraqquī [Cairo:Maktabat al-Ādāb, 2nd.ed. 2003]
 Ḥātim, Mīrfat. 2001. ‘Ā’iṣṣah Taymūr wa-Qāsim Amīn wa-ru’an mutamayyizah li-l-ḥadāthah. *Mi’at ‘ām ‘alā Tahrīr al-mar’ah*, vol.1, pp.103-18. Cairo: al-Majlis al-A‘lā li-l-Thaqāfah
 Hoffman-Ladd, Valerie J. 1987. Polemics on the Modesty and Segregation of Women in

- Contemporary Egypt. *International Journal of Middle East Studies* 19 : 23-50
- Hourani, Albert. 1962. *Arabic Thought in the Liberal Age 1798-1939*. London and New York: Oxford University Press
- ‘Imārah, Muḥammad. 1988. *Qāsim Amīn: Tahrīr al-mar’ah wa-al-tamaddun al-islāmī*. Cairo:Dār al-Shurūq,
- Khākī, Aḥmad. 1973. *Qāsim Amīn: tārikh hayātihi al-fikrī*. Cairo:Maktabat al-Anglū al-Miṣrīyah
- al-Majlis al-A‘lā li-l-Thaqāfah, ed. 2001. *Mi‘at ‘ām ‘alā Tahrīr al-mar’ah*, vol.1. Cairo: al-Majlis al-A‘lā li-l-Thaqāfah
- Mazid, Nergis. 2002. Western Mimicry or Cultural Hybridity:Deconstructing Qasim Amin’s “Colonized Voice”. *The American Journal of Islamic Social Sciences* 19, no.4 : 42-67
- Sakākīnī, Widad. 1965. *Qāsim Amīn: 1863-1908*. Cairo:Dār al-Ma‘ārif
- Shakry, Omnia. 1998. Schooled Mothers and Structured Play: Child Rearing in Turn-of-the-Century Egypt. *Remaking Women: Feminism and Modernity in the Middle East*, ed. Lila Abu-Lughod, pp.126-70. Princeton:Princeton University Press
- al-Shaykh, Ghurayyid. 1994. *Qāsim Amīn: bayna al-adab wa-al-qaḍīyah*. Beirut:Dār al-Kutub al-‘Ilmīyah
- Zaydān, Jirjī. 1902. *Tarājim mashhāhīr al-sharq fī al-qarn al-tāsi’ ‘ashar*, vol.1. Cairo:al-Hilāl [Mu‘allafāt Jirjī Zaydān al-kāmilah, vol.15-16. Beirut:Dār al-Jīl, 2nd. ed. 1994]